
焼肉発言

高村恵美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼肉発言

【Nコード】

N1345A

【作者名】

高村恵美

【あらすじ】

ひよんなことから友人に誘われて、高校2年生4月から生徒会役員を務めることになった奈緒。その結束を高めるため、一晚、学校の近くにある旅館で行われた、生徒会合宿の風景。

第1話（前書き）

この話は実際にあった話を元にして、一部変更して書きました。

第1話

時計の針が7時を指している。そろそろ夕食の時間。お腹が空いてきた。

「では、もう時間もおちているので、改めて自己紹介をして、夕食にしましょう。」

清水先生がそう言うと、会長になった葉桜先輩が立ち上がった。

「会長になりました、葉桜侑です。」

会長が終わると、他の役員も立って自己紹介をする。

「副会長の七瀬響です。」

「会計担当の菅井奈緒です。」

「同じく会計の楠原唐也ひづなです。」

「書記の林原亮です。」

「書記になりました京野まことです。」

「広報担当の浅倉修一です。部活であまり出られないけど、できる限り、顔は出します。」

「同じく広報の平岡良彦です。」

「広報の月野るいです。私も部活で出られないことがありますが、がんばります。」

「ボランティアの水野秋です。」

「ボランティアの笹野涼呼です。よろしく願いします。」

「ボランティア担当の大道寺桜です。」

全員が自己紹介を終えたところで、生徒会顧問の先生が、
「それでは急いで食堂に向かいなさい。もう準備はできています。」
と言って、休憩を宣言した。

みんなはがたがたと立ち上がって、思い思いに会議室から出て行く。

「肩凝ったー。」

「ご飯、ご飯。」

まことがうれしそうに階段を下りてゆく。この子は本当に食べる
ことが好きだから……。

会議が終わって10分後には、

「いただきまーす。」

と夕食をパクついた。今日の献立は、この会議に参加するのは4回
目という葉桜先輩の予想通り、天ぷらとお刺身。メニューはこれだ
けなのか……？

夕食を食べている間に、自己紹介を。

私、菅井奈緒です。さっきの会議で、生徒会役員になることが正
式に決定しました。2年生4月から新米生徒会会計担当として仕事
をします。

では、他の役員と顧問の先生も紹介します。

まずは会長の葉桜先輩から。彼は1年生の時から生徒会役員で、
今期は4期目。今期の役員の中では一番経験値が豊富。一言で言う
と、イガ栗……かな。

次は副会長の七瀬響君。彼は今回の前に、1年生の後期にも役員
をしていた。私と同じ学年だけど、「頼れるお兄ちゃん」とい
う印象。コーヒーが好きらしくて、よく私とコーヒーの話に花をさ
かせる。

3人目は林原先輩。幼稚園、小学校、中学校と私と同じ。美術部
で絵が上手くて、たまにイラストを生徒会室の黒板に落書きしてい
る。ルーズな坊ちゃん刈りがポイントで、笑うとチラリとのぞく八
重歯がとてもかわいい。

京野まことは、1年生の時に私と同じクラスだった、仲良しさん。
私を生徒会に誘った張本人。よく一緒にお弁当を食べると、私の特

製卵焼き（ワカメとシラス干しが入っていて、かつおだしで味付けしたもの）が好きらしくてよく取られた（私は逆にイカの天ぷらもらったけど）。

もう1人の会計は、楠原唐也君。彼は今年から理系に所属（うちの学校では、2年生になる時に文系か理系かを選ぶの）するけど、英語は学年トップぶつちぎり。やらまいかテスト（毎週月曜日の朝にやる英語の小テスト）では、年間学年トップだった。これから英語のやまを張る時に色々聞こう。

6人目は広報担当の浅倉先輩。陸上部に入っている、とても背の高い先輩。本人いわく、「フィールド競技専門だから、脚は速くない。」と言っただけど、絶対に脚速いと思うんだけどなく。陸上の大会では、走り高跳びで県大会で上位に食い込んでいる。

同じく広報担当の月野るい。長身の女の子で、合唱部所属。ミステリー小説が好きで、家に遊びに行ったら、赤かぶ検事シリーズや浅見光彦シリーズがずらっと並んでいたのは圧巻だったわ。部活がいそがしいのに、彼女を生徒会に引っ張り込んだのは私です……。

平岡良彦君は七瀬君と幼なじみで、彼も1年生の後期から役員をしている。前の任期では1年生ながら副会長を務めた敏腕ぶり。だががぼけると、鋭いツツコミを返してくれる、面白い男の子。

ボランティア担当の水野秋。去年同じクラスだった女の子で、長い髪とりりしいひとみが印象的。絵を描くのが上手くて、年賀状や暑中見舞いには、私が好きなB'zのイラストを描いて送ってくれる。

同じくボランティア担当の笹野涼呼。私のことを「奈緒さん」

と呼んでは、がばちよつと抱きついてくる、不思議な女の子。お弁当も不思議なことに、たまにカレーが入っていたりする。

最後にトリを飾るのは、我らが大道寺桜。名前だけ聞くと、どこかのお嬢様に聞こえてしまうけど、実はほわほわしていて、天然ボケで、既に生徒会内で「お笑い女王」というニックネームがついている（つけたのは林原先輩……）。幼稚園児みたいな量のお弁当でよくもつなーと感心させられる。

顧問の先生の1人目は清水先生。ひげがダンディーな40歳英語教師。

2人目は森先生。Jリーグチップスについているカードを集めるのが好きで、よく箱買いして、カードだけ取ると、本体のポテトチップスだけは生徒会室に持ってきてくれる、32歳の英語の先生。

3人目の加藤先生は、今日は仕事の都合で来ていないけど、会計担当の先生。若くて二枚目なので、とても人気のある化学の先生。

夕食の風景を中継すると、あつという間にご飯を食べ終わった男の子達が、ご飯の争奪戦を繰り広げている。あつという間にいっぱいに入っていたお釜は空っぽ。それでも食べたりないらしくて、余った桜のおかずを取り合っている。彼らの食べっぷりは気持ちいいくらい。スポーツやっている浅倉先輩はともかく、他の男の子達は、食べ盛りだからだろうか……？

ざー

「ふー、やっと一日が終わったって感じだね。」
お風呂に入りながら、みんなでそんなことを話す。長い髪を洗って、その髪をバレッタでアップにして止めると、まことが、

「奈緒はうなじきれいだね。」

と言った。

「ほめても何も出ないわよ？」

私が返すと、

「別に何か欲しいわけじゃないよ。ただ、男がいると、こうも違うものかと。」

「そうそう。奈緒さん、色っぽいよね。彼氏がいる人はやっぱり違う。」

彼女たちは、私に彼氏がいることを知っている。

「彼氏って、どんな人？」

真穂が聞いてきた。

「遠距離恋愛だよ。S市の翔陽高校で、生徒会役員やってる。」

「カップルで生徒会役員かー。」

彼氏の1歳年上の海は、ここから電車で1時間くらいかかるS市に住んでいて、翔陽高校という学校で生徒会役員をやっている。4月からは半年間、副会長を務めることが決まっている。学校では優等生で通っているらしい。本当は授業聞かずにウォークマン聞いているのに……。

「すごいよね、彼氏も役員なんて。」

「偶然よ。私だって、この前まで知らなかったわ。」

「話変わるけどさー。」

それまで黙ってうなずいていた桜が口を開いた。

「今期の男子の中に、好みのタイプいる？」

おや、めずらしい。この子がこんなことを言い出すなんて。普段は聞き役に徹して、自分から話題をふるということがないのに。

「奈緒さんは彼氏一筋だよー。」

涼呼も口をはさむ。

「そうねえ。今のところは彼一筋だわ。」

「私はねー、林原先輩がちょっとタイプかな。」

るいが言った。わからないでもないか。あの先輩かわいい顔して

るし、今期会長だったしな！

「林原先輩かー。」

真穂が納得したようにうなずく。

その時、壁をはさんでとなりの男風呂から、声が聞こえた。

「よかったなー、林原氏。」

という声が聞こえた。響君かな？

「げ。声筒抜けじゃん。」

るいが顔をしかめた。

ここのお風呂場は男風呂と女風呂の間に壁があるけど、天井に近い部分がぬけている。これは声筒抜けだわ……。

「じゃ、髪乾かしたら部屋に遊びに行くね。」

エレベーターから下りたところで、るい、まこと、桜と別れて、

部屋にもどる途中、自動販売機の前で林原先輩、葉桜先輩、楠原君がジュースを買っていた。

「おおっ！ 浴衣。」

そう叫んだのは楠原君。

「いい眺めだねー。」

林原先輩なんか、

「羽織脱いで見せて欲しいな。」

と言い出す始末。そこで、

「じゃんけん3回勝負で林原氏が勝ったら、脱いでもらおう。」

という提案が、楠原君から出された。ここで提案にのった私がバカだったわ……。何しろ林原先輩、ラッキーボーイだから（？）じゃんけんしたら私は3戦3敗。見事な負けっぷりで、羽織を脱がされて3人の目の保養（？）。

髪を乾かしてる私たちの部屋に行くと、なぜかそこには役員全員がいて、S M A Pの香取慎吾のドラマを見ていた。

布団の上に座って楠原君や響君としゃべると、思い出したように楠原君が口を開いた。

「七瀬君は浴衣が好きなんだよ。」

「何で？」

「だって、合わせの部分から中が見えることがあるから。」

慌てて浴衣の前を合わせると、楠原君は

「僕はチラリズムがどうのとは言わないよ。見るなら堂々と脱がすだけで。」

と言った。堂々と脱がすことを宣言されても、反応に困るんだけど、そうやって話していると、清水先生がドアから顔をのぞかせて、

「そろそろ寝なさい。明日も会議なんだから。」

と言って出て行った。もちろん私はそんないい子ではないし、いつも寝るのが1時近いから、10時の今は十分まだ活動時間。響君や楠原君、浅倉先輩やまことと一緒に2年生の男部屋にこっそり移動しておしゃべり続行。話に加わらない平岡君は3年生の部屋でやすみなさい。

「奈緒はうなじがすごくきれいなんだよー。」

まことが言い出した。ここでも彼ら悪のり……。しかも、ここでもじゃんけんに負けて、結局髪をアップにすることに。部屋にバレツタをとりにもどろくと、ふすまの所まで歩くと、後ろから浅倉先輩の

「菅井さんは歩き方がつやつぱいよね。」

という台詞が聞こえた。どこを見てるんだか。

髪を上げてふすまを開けると、3人とも

「おおっ！」「いいねえ。」

と小さく歓声を上げた。

話はいつの間にか“萌え”の方向へ。

「髪型はポニーテールが一番。あの放物線の形がたまらん。」

楠原君がそう言えば、

「あー、お前があの人のこと好きになった理由が、いつもポニーテールだったからだもんな。」

と茶々を入れる。そう言う響君は？と聞くと、

「おれはセーラー服に長い三つ編みと眼鏡。これが最強。」

と返ってきた。浅倉先輩に至っては、

「風呂上がりに浴衣着て、石けんの匂いさせながら線香花火させているようなおとなしい子が好み。」

とどっかヘトリップ気味。

「私は外見ではあまり考えないな。自分の理想に合う人なんて、そうそう見つかるもんじゃない。」

とシビアなお答えを出したのはまこと。

「菅井さんは？」

浅倉先輩に聞かれて、

「外見は背が高くて、実験用の白衣と眼鏡が似合う方がいいな。」

と答えると、まことが私の首に腕を回して、

「彼氏はそんな人なんだ？」

とツツコミを入れてきた。ええ、確かに背は高いし、白衣も眼鏡も似合う人ですよ……。

「菅井さん、髪切る予定ある？」

響君が聞いてきた。

「ないよ？　しばらくはこのまま伸ばすつもり。」

と答えると、彼はガッツポーズして、

「じゃあ、今度三つ編みにしてきてよ。眼鏡だれかの借りて。」

と言った。私は裸眼でも両目1・0はある。

「でも、セーラー服がいいんでしょう？　うちの学校はブレザーだよ？」

うちの学校の制服は、男子が濃いグリーンのブレザーと同じ色の地に赤いチェックのズボンと、赤いネクタイ。女子はグリーンのブレザーにチェックのスカート、リボン。彼好みのセーラー服じゃないんだけど？

「この際、制服は気にしないから。」

2日目は朝から文化祭の企画についての会議。そこで私の担当は、

ビッグアート（廃材を利用して、大きな絵を作る）、当日の大量に出るゴミを集めるゴミ箱展示、チャリティーバザーになった。他の企画は、HR展、えのフェスタ（2日ある内の1日目夕方に行われる一発芸大会）、交流試合、開・閉祭式、有志ライブなど。

「それでは会議を終わりますが、生徒会役員が動かないと、他の生徒は絶対に動かないので、自覚を持って準備に取り組んで下さい。」という会長の言葉でこの生徒会合宿は幕を閉じた。

この時、私はこれからの生活がどれほどハードになるかなんてこと、想像もしていなかった。

第1話（後書き）

作者が実際に7年前に体験したことを元に書きました。 まだまだ続きます W

第2話（前書き）

ひよんなことから友達に誘われて生徒会役員を務めることになった
奈緒。忙しい日々が始まる・・・。

第2話

R R R… R R R…

「奈緒ー、七瀬君からー。」

階下でお母さんが呼ぶ声がする。電話を部屋の外に置いてある子機に転送してもらって、子機を取ると、部屋にもどって手帳を開く。ビッグアートの企画と一緒に担当することになった響君からは、ここ2、3日だけで何回か電話がかかってきていて、電話にでるお母さんにもすっかりおなじみだ。

「もしもし、お待たせ。」

ここ2、3日、ずっとこんな調子だ。この2日間で私の手帳はあっという間に黒く染まった。企画書の提出など、予定がぎっしり。

「もしもし、悪いけど、ビッグアートの企画書作れない？ おれのワープロ壊れて使えないんだ。」

いきなり言われて私は大パニック。

「企画書って、何書けばいいの？ 過去の企画書を見たことがないんだけど。」

企画書ぐらい、一度目を通しておくんだつたと大後悔。

「去年のをおれが持つてる。菅井さんちFAXある？ あるなら送るから。」

「残念ながら、FAXなんてうちにはないよ。」

うちはこのご時世に及んでFAX機能のない電話。FAXがないのって、こういう時に困るのよ……。

「そっちまでバスで1時間かけて取りに行く気にもなれないし……。」

「

学校に近い彼の家と、バスで1時間かけて通っている私の家は、かなり遠い。しかも困ったことに、私は小さい時に自転車の後ろから振り落とされたことがトラウマになって、いまだに自転車に乗れない。

ちよつと考えた響君は、

「じゃ、おれが菅井さんの家に行くよ。」

と言ってくれた。それはありがたい。願ってもないことだわ。

「おっけー。じゃ、コーヒー入れて待ってるよ。」

いつもはインスタントコーヒーだけど、お客さんが来る時はドリッパで入れる。自分もおいしいドリッパで飲めるから、客人は大歓迎。

「じゃ、おいしいのをお願い。」

「了解。自分も飲みたいからね。50分もあれば着くでしょう?」

「うん。待ち合わせは?」

「じゃ、S大の工学部正門で。」

「おっけー。じゃあ、また後で。」

電話を切ったら、後は部屋を片づけて掃除機をかけて、コーヒーを準備。ちようどお母さんがアップルパイを焼いてくれたから、それも出そう。

50分後、彼は時間きっかりにS大工学部正門にいた。

彼は背が高い(180cmくらいはあるかな?)から、どんな服も似合う。今日は暖かいので、薄手のセーターにジージャンをはおり、ジーンズという格好。眼鏡がアクセントで、知的な印象を与える。

部屋でコーヒー(今日はブルーマウンテン)を飲みながらワイプ口をたたいていると、だれかが階段を上ってくる音が聞こえた。その音は部屋の前で止まると、ドアが開いた。上ってきたのは3歳違いで、一緒に部屋を使っている妹。彼女は彼に軽く会釈して、本棚からマンガを5、6冊引っぱり出すと、ものすごい音とともに階段を下りていった。階段を下りたところで聞こえた声は、

「お姉ちゃんの彼氏がいる!」

だったから、2人で大爆笑。

「ごめんね、早とちりな妹で。」

「本当に付き合ってたら、もっと雰囲気いいよなー。何が悲しくて

企画書打ってなきゃならんよ?」

本当だ。何で付き合ってまで、企画書打ってなきゃならんのか。

「彼氏は一応いるんだけどね。」

そうつぶやくと、響君は

「そうだね。この前の合宿の時、風呂に入ってたら聞こえた。」

と言った(聞こえてたのか……)。

「ほら、タンスの上に写真あるでしょ?」

そう言っただけでタンスの上の写真立てを指さす。1ヶ月前、仕事が忙しくなる前に、近くの遊園地に行った時に撮ったものだ。響君はその写真立てを取ると、

「背、高いねえ。おれぐらいあるね。」

「うん。中学の時、バレーやってたんだって。」

彼の言う通り、海は背が高い。やせてはいるけど、お笑い芸人のアンガーズみたいになりがりというタイプではなく、ほどよく筋肉がついていて、どちらかと言えば、逆三角形の身体だ。

「さて、問題はビッグアートの材料なんだけど、ペットボトルでいいかな? 四角いの。」

「うん。つるす場所は去年と同じ進路指導室の外側、3階の渡り廊下から。寸法も去年と同じでいいよね。」

私は安直に考えていた。

「去年使ったのはトレットペーパーの芯だよ? サイズが違うからもう一度ペットボトルのサイズを測らないと。本数も計算しないと、生徒に協力頼めないよ。」

と言って、彼はバッグの中から四角いペットボトルを取り出した。

「縦21cm、横7cm。これに色紙を貼るから、色紙は縦21cm×横7cm×3面。ビッグアートは去年の企画書によれば、縦15m×横7m。計算すると……、ペットボトルは横128列×縦57本。全部で7296本。」

……そんなに集まるのか? 集まるんだろうなあ。

「で、つなぎ方なんだけど。何かいい方法ないかな?」

去年はトイレットペーパーの芯をにビニール紐を通して、下は小さなポンポンをつけた。今年はできればポンポンの手間を省きたい。そこで私の頭に名案が浮かんだ。

「ペットボトルのふたに、はんだごてで穴を2つあけて、そこにテグスを通したらどうか？ その上にペットボトルを57本つなげるの。」

「？」

私は階段下の物置からはんだごてを出してきて、響君が空けたお茶のペットボトルを洗い、テグスを準備。

「じゃ、実演するわよ？」

そう言つて、まずはふたに2つの穴をあける。次に、その穴にテグスを通したら、ふたの内側でぬけないように結ぶ。次に、ペットボトルの底に1つ穴をあけて、そこにテグスの先を通す。

「これを57本通すの。」

「なるほどね。口答で説明してもわかりにくいから、サンプルを1クラス1本ずつ作ろう。そんなに長くなっていいから。」

これでつなぎ方も決定。後はどれだけペットボトルが集まるかだけだ。

「回収の通達も作らなきゃね。1クラス1枚でいいから。ただ、中を洗って出してもらわないと、生徒会室で虫が発生しそうだね。」

「うん。となりの資料室も危ないね。」

そして4月1日、私たちの初仕事が行われた。今日の仕事は、入試に合格して入学が決まった新1年生への入学説明会の準備。

私は朝一で生徒会室に着いたつもりだったのに、既に先客がいた。響君だ。彼は去年の文化祭のチャリティーバザーで売れ残った電気ポットでお湯をわかし、家から自分で持ってきたらしいインスタントコーヒーを飲んでいた。室内にはコーヒーのいい香りが漂っている。

「おはよう。いい物飲んでるね。」

「うん。菅井さんも飲む?」

彼はそう言つて、電話が置いてあるスチール製のたなの上に置いてあるポットの上にかかっているカバーを外した。

「たしか、資料室に去年の売れ残りのカップがあるよ。」

そう言つた彼は、資料室から本当にマグカップを持ってきてくれた。

「お好みは?」

彼がコーヒーのびんを開けながら聞く。私はちよつと考えて、

「アメリカンくらいでいいな。カップの半分くらいで。」

そう言つと、彼はアメリカンを作ってくれた。

「いよいよ初仕事だね。何するんだろう?」

まだ生徒から承認されていない私たちだから、表だった仕事はしないはずである。

「多分、配布物を新入生が来る前に席に分けたり、案内とかじゃないかな?」

そうか、そんな仕事があるのか……。

「ところで、今日つてエイプリル・フルじゃん? 菅井さんに協力してもらいたいことがあるんだけど。」

「協力?」

ゆっくりコーヒーをすすつて、飲み終わるころ、生徒会室に役員が集合した。

「おはよう。」

「おはよう。」

全員がそろつたところで、響君が口を開いた。

「実は、みんなに言っておきたいことがあるんだ。」
「?」

私は口をはさまないで、彼の次の台詞を待つ。

「実は、おれと菅井さんは兄妹なんだ。」

「はあ?」

「私から説明するわ。つい最近わかったことなんだけど、響君が兄

で、私が妹なの。」

みんな、ますますわからないという顔をするばかり。

「実は、異母兄弟なの。私の母は未婚で私を産んで、今の父と結婚したの。私の実の父は、響君のお父さんなの。」

「どうしてわかったんだ？」

葉桜先輩が聞いた。無理もない。今まで私と響君は全く接点がなかったのだから。

「この前、企画書を作り菅井さんの家に行ったんだ。そしたら、菅井さんのお母さんがおれの声を聞いて、おれの若い時の父親の声にそっくりだったらしくて。で、父親の旧姓を聞かれたんだ。そして、間違いないって。」

そこまで言うと、彼は私の頭をぼんぼんと軽くたたいた。みんなの顔を見ると、もう信じ切った顔をしている。

「……ぷっ。」

もうだめ。これ以上がまんでできない。私はみんなの顔がおかしすぎて吹き出してしまった。

「完璧だったね。」

「ほんと。響君嘘上手すぎ。」

「嘘？」

涼呼が聞いてきた。そろそろ潮時かな。

「エイプリル・フルだよ。」

「そうそう。4月バカ。」

「よく考えてよ。そんな私たちが兄妹なんて偶然、そうそうあったらたまらないよ。」

「4月バカ……。今年こそはたまされなと思ったのに……。」

真穂ががつくりと床にひざをついた。……というわけで今年のエイプリル・フルは大成功。

そして始業式当日から、私たちの超ハードスケジュールが幕を開けた。

授業中に先生の目を盗んで企画書を書いて、休み時間ごとに清水先生の所に書き上がった企画書を持っていたり、夜中に企画書を書いて、寝坊こそしないものの、授業中には夢の中だったり。特に4月中はそれぞれの企画書を提出して、OKが出て初めて職員会議で審議してもらい、採択されてから、初めて生徒に指示を出せる。企画書が遅いと、企画自体が消えるので、みんなもう必死。

そんな風にあわただしく4月が過ぎ去ろうとした。ところが4月半ばの放課後、予想だになかった事態が発生した。

「葉桜が入院だって！」

会長と同じクラスの浅倉先輩が、生徒会室に入ってくるなりそう言った。

「え！？」

「入院！？」

生徒会室はプチパニックになった。浅倉先輩が言うには、授業中、腰が痛くなつて早退して病院に行つたところ、椎間板ヘルニアだと言われて、即入院になったらしい。

「困つたな。ビッグアートの勝手知つてるの、会長だけだよ。」

今期の役員の中で、去年の文化祭を役員として経験しているのは、会長だけだったりする。

「検査入院だけど、しばらく学校来れないらしいよ。」

何てことだ。

その日から副会長の響君が、会長を兼任することになった。彼の指示はどんな時も的確。

忙しい中、みんなに的確な指示を出していく彼に、私は次第にひかれていくことを感じずにはいられなかった。

「アートにどれだけ場所取るか測りに行きたいんだけど、手伝つてくれないかな？」

「おっけー。」

響君に声をかけると、彼は快く二つ返事を返してくれたので、チ

ヨークとメジャーを持って潮風が吹き付ける渡り廊下へ。

「風強いね」。当日、下の植木に結びつけないとだめだね。」

この風のせいで、長いポニーテールが絡まる。この風と、20年前から予想されているT沖地震さえなければ、いい環境なのに。

「手すりの長さが12m、アートが7mだから、ちょうどこの辺からつるせばいいね。」

チヨークでコンクリートの手すりに印をつけて、手すりの内側の段から下りようとしたその時、背中の方から急に強い風が吹き付けた。ウエストの所でたくし上げて、ミニにしたスカートがひらりとひるがえって、慌てて押さえる。それを見た響君が、ぱちんと指を鳴らした。

生徒会室にもどる途中、廊下を歩きながら上目遣いに

「見た？」

と聞いてみた。

「もう少し。」

彼は口惜しそうに言った。

その夜、宿題をしながらふと思った。「自分は響君のことが好きなんじゃないか。」と。その気持ち、今の段階では恋愛感情なのか、それとも友達としてのなのかはまだわからない。とりあえず、事前研修の頃は「普通の友達」という感じだったけど、今は、「大事な人」という感じで、少し変わってきている。そりゃ、生徒会で毎日のように顔合わせるし、一緒にやる仕事も多いから、親密になるのはみんな変わらないんだけど、響君は、特にそう思っている気がする。

その時、

P i P i P i : P i P i P i :

机の上のポケベルが鳴った。このポケベルは、海と付き合い始めた頃、いつでも連絡が取れるようにと、持っていなかった私に海が持たせてくれた物で、番号は海しか知らない。

読むと、

「コンドノニチヨウ デートシタイ!」
と入っていた。海とは仕事の予定が合わなくて もう2ヶ月会って
いない。顔を見たくて、
「イイヨ。イツモノバシヨトジカンデネ。」
と返信すると、
「ジャ、ニチヨウニ。」
と返信があった。

第3話（前書き）

生徒会役員がようやく始動。そこへ「会長入院」という、前代未聞のニュースが飛び込んできた。会長不在のまま、仕事は進んでいく。

第3話

日曜日、私と海は、2ヶ月ぶりに会って、カラオケに行った。海は、今人気のアーティストで、スカーフを風にひらひらさせているプロモの曲を歌ったり、歌いながら

「歌詞が危なすぎて発禁になった曲。」

と解説してくれたり。

後はマクドでコーヒーを飲みながらお互いの生徒会や文化祭の話で盛り上がったり。

「奈緒の学校の文化祭はいつ？ 予定なければ行ってみたいんだけど。」

「んーとね、6月の3日と4日なんだけど、一般開放は4日だけなの。」

「おっけ。空いてるよ。一緒に回ろうか。」

「残念。役員だから、見回りで腕章つけて歩くか、生徒会室に詰めていなくちゃならないのよ。ほとんど休みがないから、ほとんど回れないと思うよ。」

「そっかー。じゃ、友達1人連れて行こうかな。」

「そうしてくれるとありがたいわ。学校に着いたらベル鳴らして。正門くらいまでは行けるから。」

と私たちは、文化祭で会う約束をした。

夕方、駅の改札で別れる時、

「じゃ、文化祭で。」

と言った私に、急に海の唇が、私のそれに触れた。そのまま海は振り返らずに改札を抜けて、ホームへの階段を上っていった。私は一瞬何をされたのかわからなかった。だけど、人混みの中でキスされたんだとわかった瞬間、顔に血が上るのがわかって、私は、その場を逃げるようにしてバスに乗った。

その夜、私は1つ結論を出した。「海のことを好きなんだ。」と。

自分の気持ちにうそはつけないから、もし仮に「響君のことが好き。」という結論を出したら、文化祭の時、ちゃんと理由話して別れるつもりだった。でも、その必要がなくて、正直ほっとした。他に好きな人ができたりして、嫌いでもないのにふるのは、本当につらいし、エネルギーを使う。過去にそうやって1人ふったことがあるから、その悩みはわかつているつもり。もっとも、その時は好きな人に告白したら、玉砕した。

その“あだ名”は突然つけられた。

「姉御、会計の仕事行くよ。」

楠原君がそう言つて、私の肩をポンとたたいた。

「姉御？　だれがよ？」

私が聞くと、楠原君は

「肩たたいたんだから、菅井さん意外にはありえないよ。この生徒会で、菅井さん以上に強い人いないでしょ？」

強い？　私が？

「まことがいるよ。私は彼女には勝てないんだけど？」

「京野さんも、菅井さんの方が強いと断言したよ。」

あ、響君も参戦してきた。

「と、いうわけで姉御、お仕事行ってらっしゃいませ。」

そう言つと、彼は最敬礼した。

「ちよつと、私は姉御なんかじゃないってば！」

そうわめく私の手首をつかんで、楠原君は私を生徒会室から引きずり出した。

「なんで“姉御”なのさ。」

職員室で会計の仕事（振り込み用紙の記入）をしながら、ふくれつ面で楠原君に聞いてみた。

「強くて姉御肌。七瀬君に言ったら、彼も賛成してくれたよ。」
なるほど。仕掛け人はこいつか。

そんなこんなで、結局役員から（その内に響君たちの友達からも）

“姉御”と呼ばれるようになり、私も否定するのが面倒くさくなつて、その呼び名が1週間くらいで定着した。本当はすごく気が弱くて、それを隠すために気を張ってるんだけどね。

「それじゃ、15HRからパーツを渡り廊下に通んで下さい。」

そう言つて1年生の各クラスを回りながら、ビッグアートの仕上げに取りかかるよう、指示を出して回る。

今日は午後は文化祭の準備に丸々使えるから、この時間で何とかしてビッグアートを完成させないと。文化祭は明日から2日間。アートは今日は組み合わせるだけにして、つるすのは明日の朝にした(去年、前日からつるしたら、真ん中のひもを切られておしゃになつた)。

「姉御、全部運んだよ。」

ああ、すっかり定着したわ、この呼び名。楠原君がそう言いながら生徒会室に入ってきた。

「すぐ行くわ。」

私もぐずぐずしてられない。段ボール箱にとりあえず使いそうなメジャー、テープ、カッター、マジックなどがあるだけ放り込んで、渡り廊下に向かう。

「色紙を巻くところまでは、全クラスできてるよ。」

「本当に？」

昨日見回した時には、9クラス中、7クラスがペットボトルをつなげただけだったのに？

疑いながらも渡り廊下に出ると、できてる！ 本当に全クラスできてる！ 色紙だって、ちゃんと巻いてある。役員の中でも、このビッグアートの責任者をしている私にとっては、本当に感動モノ。普通、間に合わないクラスが1つ2つはあつて、それも想定していたんだけど。

と、感動にひたるのはおいといて、すぐに全員に指示を出す。

「色と色の境目があるクラスは、境目をマジックでなぞつて、遠く

からでも見えるようにして下さい。境目がないクラスは、他のクラスの手伝いに回して下さい。」

そう言って、私はコンクリートの手すりの角にガムテープを貼る。これは風で揺れた時にテグスが切れるのを防ぐため。

結局、1年生の担当者と生徒会役員がフル稼働して、ビッグアクトが完成したのは夕方だった。片づけをしてから1年生を解散させて、生徒会室にもどると、日がかなり傾いていた。

「七瀬たちが他の企画でいない間、1人でよく頑張ったね。お疲れ様。」

そう言って林原先輩がくしゃくしゃと頭をなでてくれた。

「奈緒さん、バスの時間だけど、いいの？」

涼呼に言われて時計を見ると、バスの時間まであと7分しかない。ここからバス停まで10分近くかかるのに。

「ごめん、今日は帰るわ！ また明日！」

そう言って、バッグをひつつかで生徒会室を飛び出した。

バス停まで走ると、後ろから林原先輩も走ってきた。今日は先輩も自転車ではなくてバスだったんだな。

バスにはぎりぎり間に合った。

しばらくして、前の席に座っている先輩が振り向いた。

「奈緒ちゃん、来期も生徒会やるの？」

「はい。」

正直、あまり考えていなかったけど、そう返事をしていた。仕事は多いし、自分の時間ってあまり取れないけど、今の生徒会は居心地がいいから、どうせなら来期も役員をやりたい。

先輩の口から、こんな言葉が飛び出した。

「来期、副会長やってみない？」

「副会長！？ 私が！？」

「そ。奈緒ちゃん、責任感あるし、しっかりしてると思うよ。今の役員の中で、一番適任だと思うんだ。会長は七瀬がやるだろうし、それを後ろで支えているくらいに考えたらいんじゃないかな？」

会長経験者としては、バックに信頼できる副会長がほしいんだよね。」

急に言われたから、頭の中は大パニック。私が副会長だって？

「でも、副会長の責任って、今の会計とは比べ物にならないじゃないですか。私には務まりませんよ。」

私がそう言っていると、先輩は優しく笑ってまた頭をなでながら、

「そんなに深く考えなくてもいいんじゃないかな？ さっきも言っただけど、後ろで会長を支えるくらいだよ。それに、後期は仕事少ないんだから。せいぜい、柴蘭（学校誌）の編集と、学校新聞の執筆くらいなんだから。」

と言ってくれた。

「他の平岡君とか、楠原君でもいいと思うんですけど。」

「平岡は去年の後期に副会長やってたし、楠原は進学クラスだから、そろそろ勉強に本腰入りたいみたいだよ。それに、こういう役はできるだけ多くの子に経験してもらいたいんだよ。生徒会役員なんてだれもが経験するわけじゃないんだよね。せつかくのチャンスだと思っよう。」

「じっくり考えて、響君たちとも相談してみます。」

「うん。それがいいよ。」

そんなことを話していると、バスはターミナルに着いた。バスを乗り換える先輩が、

「じゃ、明日から2日間頑張ろうよ。」

と言って、私も笑顔で返す。

「はい。じゃ、おつかれさまです。」

（私が副会長……？）

第4話（前書き）

生徒会の仕事にも慣れ、軌道に乗ってきたと思ったら、文化祭前日、なんと、先輩から「来期の副会長に。」と持ちかけられた奈緒。さあ、どうする・・・？

第4話

当日の朝は、もう大忙しだった。自分のお弁当の他に、だれかが絶対に朝ご飯ぬきで来ると思って、台所にあつたロールパンとベーコンでサンドイッチ作つたり。学校に着いたら、ビッグアートをつるしてその補正をしたり、開祭式の準備をしたり。

「今日は会長来るかな？」

一息ついて私が作ってきたサンドイッチをパクつく響君に言つと、
「来るんじゃない？ もう、俺が代打で言つの嫌だよ？ 認証式でも俺が代打だつたんだし。」

結局、会長は検査入院だけだったはずが、本当に椎間板ヘルニアで入院してしまい、それ以来、学校には来ていない。それ以来、認証式では会長の言葉を響君が代打で言つて、その分、行事報告を会計の私が言うことになったり、年間の決算・予算報告は全部楠原君が言うことになったりと、ずいぶん、変則的だった。

その時、生徒会室のすみで、書類にうもれた黒電話が音を立てて鳴った。

「はい、生徒会室です。」

秋が話を終えて電話を切ると、につこりして振り向いて言つた。

「会長、やっぱり今日も休みだつて。」

響君はがつくりと肩を落として、

「またかよ。おっさん、早く退院してくれないかな。」

と言つと、あいさつの原稿作りに取りかかった。彼なら10分もあれば十分だろう。

「頑張つて。体育館に暗幕張りに行つてるから。」

会長不在というハプニングがあつたけども、今日のイベントは滞りなく済んだ（後でライブの出演者に退学者が紛れ込んでいたという事実が発覚したけれど）。明日は海も来るんだし、頑張らないと。

その夜、

P i P i P i ……

机の上のポケベルが鳴った。見ると、

「ガッコウマデノミチヲオシエテ。」

と入っている。しまった、学校までの道順教えてない。

R R R ……

「もしもし、海？ ごめんね、学校までの道教えてなかったよね。」

「本当だよ。俺を干物にする気だろー？」

「おいしくはなさそうだなー。」

声は笑ってるけど、明日、絶対にいじられるな。

「バスはね、ターミナルの5番乗り場から6番のバスに乗って。バス停は江之島荘。バス停からは一本道だし、他にも人がいるからわかると思うよ。」

「わかった。」

電話を切ろうとした時、

「そう言えば、奈緒の制服姿、初めて見るんだよね。」
と言った（どうやら楽しめらしい）。

電話を切って時計を見ると、もう11時。

「ふぁ……。もう寝ちゃおう。」

明日、海にクマのできた顔で会うわけにはいかない。

明日もハードスケジュールだし、お弁当作らなきゃ。

「奈緒、たしか書道できたよね？」

るいがそう言って差し出したのは、本文が書かれた賞状9枚と、予備3枚。

実は私、これでも書道歴8年、初段の腕を持っていたりする。

「うん。何、これ？」

「閉祭式で各部門ごとに表彰があるんだよ。閉祭式の前でいいから、これ書いてくれない？」

字きれいなんだし。」

その時、ベストのポケットにクリップで止めたポケベルが鳴った。
「正門行ってくる。」

「何しに？」

「彼氏迎えにー。」

海は正門に立っていて、他の女子生徒の注目を集めていた。中には、

「一緒に回りませんか？」

と声をかけている子までいる。

6月のこのいい天気の下、海はなぜか冬服。暑くないんだろうか？

「お待たせ。暑くない？」

ああ、2週間ぶりに会って、第一声がこの台詞。何てかわいくな
いんだろう。

「2週間ぶりに会ってその台詞はないだろう？ これから一緒に回
れないか？」

「いいよ。1時間半くらいだけど。後は賞状書いたり、巡回しなく
ちやならないの。……友達と来たんじゃないの？」

そう聞くと、海は

「俺より自分の彼女を取ったんだよ。」

と言った。それでいいのか……。

そんなんで1回生徒会室にもどって巡回のシフトを確認している
と、林原先輩と響君が寄ってきた。

「あれが奈緒ちゃんの彼氏かー。」

「菅井さんをおとす男って見てみたかったんだよね。きつとよほどの
物好き……。」

その台詞を言い終わるかどうかの時、胸の辺りにこぶしを固める。
「ひいひい！ つ、つい本当のことを！」

「え？ 何だって？」

左手をほおに当ててにっこりと微笑む。と、同時に、響君がすね
をおさえてうずくまる。

え？ 何をしたかって？ 向こうすねを蹴飛ばしただけよ？

うずくまる響君は放っておいて、廊下に出ると、海に

「何か言ってたけど、どうしたんだ？」

と聞かれた。

「うっん、私と付き合うなんて、よほどの物好きなんだなって。」

「言ってる。俺、怖い物知らずだから。」

海の手の手を思いつきつねってやった。

「いてっ！　かわいらしく手でもつなぐのかと思ったんだけどねー。」

「

残念でした。私は学校ではそんなことはしません（はずかしいから）！　人混みの中でキスするようなキス魔とは違うわ！

「そう言えば、制服って、案外普通のブレザーなのな。俺、セーラ服を期待してたんだけど。」

まだ何か言ってる。

「何で男の人って、セーラー服が好きなの？」

「セーラー服は男のロマンだって。」

……放っておけ。

HR展のお化け屋敷なんかを回っていると、もうお昼。

「お昼ご飯にしようか？　お弁当作って持ってきたんだ。」

「まじで？　いいねえ。」

ベランダから生徒会室に入ると、るいが

「あれ彼氏？　いいねえ、背が高い彼氏。」

と言ってる。

るいを生徒会室に放置して、お弁当とお茶を抱えて窓からベランダに出ると、そこに海はいなかった。見回すと、ベランダの入り口で、4月に異動してきた家庭科の和泉先生と話しているのを見つけた。しかも、何だか仲良さげ。海は私を見ると、手招きをした。行ってみると、海は私の頭をぽんぽんとたたいて、

「俺の彼女。」

と言った。これには和泉先生もびっくり。先生は私のクラスの家庭

科も担当していて、私もよく話すから。

「そうなの？ 世間って狭いのねえ。それに、両方とも生徒会役員って、すごいじゃない。」

「でしょ？ 俺も、自分の彼女の学校で、先生に会うとは思わなかったよ。」

私、そう言つて笑い合う2人を見て、何だか普通の教師と生徒の関係じゃないような気がした。何だか、もっと親密な関係のような気がする。そんな思いは、私の考えすぎなのかのしれないけど、でも、その考えが、墨をこぼしたように、頭の中にどんどん広がっていく。そして、2人の過去を想像してしまう。前に付き合っていた禁断の関係で、関係が関係だけに別れざるをえなかったとか、どちらかが片思いしていたとか。ろくな事が浮かんでこない。

「じゃ、仲良くね。」

先生はそう言つて職員室に戻つて行つた。大人の魅力たつぷりに長いストレートのワンレングスの髪をなびかせて。

「どうした？ 顔、暗いぞ？」

心配して、海が顔をのぞき込む。

「ううん、何でもない。それより、ご飯にしようよ。ほら、お弁当2人分作つたんだよ。」

自分が作つたお弁当を、高々と掲げる（そう言つても、海の目の高さにはかならない）。

ベランダでも日陰になっているところでお弁当を広げる。今日のメニューは唐揚げや卵焼きなど定番メニューだから、失敗はないはず。

「もしかして、関係疑つてるの？」

ぎくっ！ 海、鋭い……。図星じゃないか。悔りがたし（私が顔に出やすいだけじゃないかというツツコミはなしで）。

「安心しなよ。和泉先生は、去年まで俺の高校にいて、俺のクラスの家庭科を担当していただけだから。第一、俺、相手が年上だと上手くないから。」

そういつて、なだめるように頭をばんぽんとたたいた。

「でも、普通の教師と生徒って感じには見えなかった。もっと、親しそつだったもん。」

上目遣いに私が言うつと、

「そう見えたなら、ごめんな。」

そう言つて頭をなでた。

お弁当を食べ終わると、もう時計は1時を指している。桜が窓から身を乗り出して私を呼ぶ。どうやら、HR展とかの順位結果が出たらしい。そろそろ頼まれた賞状書かなきゃならない。

「じゃ、俺帰るわ。あと少し頑張れよ。」

「うん。ありがとうね。」

そう言つて、海は生徒会室前の螺旋階段を下りていった。

それから私は巡回のシフトを桜にバトンタッチして、賞状を書くことに取りかかった。字にこだわる私は、賞状の字をマジックではなく、墨で書くことにした。マジックだと色あせる字も、墨で書くと色あせないから。

「凝ったことするねー。色あせないからきれいだけどさ。」

楠原君が書き上がった賞状をのぞき込む。

「どうよ？ 伊達に初段の腕じゃないでしょう？」

少しだけ胸を反らすと、まことがすかさず

「墨で書くと、それだけできれいに見えるから不思議だね。」
と言った。いつも一言多いんだつてば。

この後、何か行事があると私が賞状を書くことになったのは言うまでもない。

文化祭が終わった次の日は、午後は代休で授業がなく、午前中もインターハイの壮行会だった（女子テニス部と陸上部からは何と、浅倉先輩が円盤投げで出場！）。久々にゆつくりできると思っていたら、司会が回ってきた（「野郎の声よりも、女の子の声の方が聞いてて気分がいい。」という響君の意見に男子が賛同。女子でじゃ

んけんしたら、ここでも私が負けた」。

壮行会が終わって、教室にもどる途中の廊下で、その話は襲ってきた。

「姉御、後期で会長やらない？」

そう言っ て肩をたたいたのは響君だった。

「会長!？」

この前林原先輩に言われた副会長の話でもあつぷあつぷなのに、今度は会長だつて!？」

「私にはそんな統率力とかないよ。響君はやらないの？」

「俺は裏で糸ひく方が好きだから。それに、統率力とかは生徒会の中だけの話。一般の生徒は先生たちに任せればいいんだから。それに、俺や平岡とかもバックアップするからさ。安心してよ。」

そこにちょうど、楠原君と葉桜先輩（久しぶりに見たな……）が合流してきた。

「じゃあ、私より会長向きの器を見つけないとね。どっかにいるよ。」

私がそう言うと、3人は私を指さして（失礼な）

「他にだれがいる？」

と異口同音に言った。響君はまた私の肩をたたいて、

「姉御は責任感あるし、仕事早いから俺としてはその手腕買ってるんだよ？」

と言ってくれた。確かに私は長女で、今まで13年間「お姉さんなんだから。」と言われて「しつかりしなくちゃ。」と育つてきて、生活班の班長とか、学級委員とか、今では文芸部の部長なんてやっていたりするけど、生徒会役員なんて、その比じゃないし、トロイ私にはとてもできそうない。しかも、バスの時間の都合で、遅くまで学校に残れないし。

「バスの時間は気にしなくていいよ。帰った後は俺が指示出すから。」

響君が満面の笑みで言う。

「それなら、余計に響君がやった方が良くない？　去年もやってたんだから、勝手知ってるでしょ？」

「さっきも言っただじゃん。裏で糸を引く方が好きだって。他にやりそうな人も今の2年生でいないし。それに俺は後期で引退するつもりだけど、来年の前期の役員が不足したらやらなきゃならないし。来年の前期に姉御がやるより、俺がやる方がいいと思うよ。姉御が前期にやっても、すぐに帰らなきゃならないから、かえってやりにくいだろうしね。後期の仕事は学校誌の編集と学校新聞の執筆だから、早く帰っても問題ないというわけ。清水先生だって、『次の候補者がいない限り、今の役員の中から候補者を出すから、考えておけ。』」

「って言ってるんだし。候補者が出れば、それでよし。」
「う、何だか言いくるめられそうだぞ。そりゃ色々やってみたいとは思っけど、会長となると、ちょっと。」

SHRが終わっても、生徒会室に集まってみんなでコーヒー飲みながら、喧々囂々（けんけんごうごう）の激論再開。

「この前、林原先輩に『副会長やらない？』って言われたばっかだよ。私は会長よりも副会長の方が、絶対に性に合っつて。」

「副会長は前期でも十分できるって。会長はやつたら、絶対にプラスになるし。それに、会長職をそこまで深刻視する事はないよ。バツクアップはするし、右坂のおっさんだって、そんなに凄い人ってわけでもないんだから。」

言いくるめが得意な七瀬君には、口じゃとても勝てそうにない。大体、既に後期も役員を続ける気にいるし。会長っていう気はまだ更々起こらないけど。寧ろ、副会長の方が、絶対に性に合う！

柴田君は後期はやらないつもりでいるから問題外、桜や真穂は人前が出るのが苦手な性格。私だって、人前が出るのが好きというわけじゃないんだけどなあ。

第5話（前書き）

文化祭が終わった次の日、インターハイの壮行会が終わった後、響から「来期の会長に。」との打診。副会長との間で、心は揺れる。

第5話

「姉御、ゴミ箱焼却炉に運ぶの手伝って。」

響君がクマのプーさんの形をしたゴミ箱を抱えて声をかけた。

「おっけー。」

ゴミ箱の処分は、作った本人たちに見られないように、生徒がほとんど帰った時間に行われる。だから空はもうだいぶ茜色に染まっている。

「優勝作品のタイタニックだけ残して、後は処分しよう。資料室が狭い。」

今年の最優秀作品は、流行した映画「タイタニック」の船を模した物。芸が細かいことに、船首の部分にはジャックとローズの人形がちよこんとついていて、煙突の部分からゴミを入れられるようになってる。

「作った本人たちには見られたくないね。文句言われそうだし。」

「そうそう。」

そんなことを言い合いながら、ゴミ箱を引きずるようにして駐輪場のとなりにある焼却炉に運ぶ。

最後のゴミ箱を運び終わって、帰りに駐輪場の前を通った時だった。

「菅井さん。」

「はい？」

振り向くと、響君がいつになく真剣な表情で立っている。

「何？」

聞き返すと、彼は言った。

「好きです。」

と。

「何が？」

思わず聞き返してしまった。2人の間に沈黙が流れる。

その内に、私の方が気付いた。告白なんだ、と。確かめようとしたその瞬間、彼の方ががまんできなくなって吹き出して言った。

「焼肉！」

……は！？ 焼肉！？

「姉御の反応、京野さんと全く同じだったよ。……面白くねえ。」

そう言つと、彼は走つて生徒会室にもどつてしまった。後に残された私は、しばらくぼかんとしていたけど、急に目頭が熱くなってきた。その時、初めて

「響君のことが好きだったんだ。」
と気が付いた。

重い気分を引きずつて生徒会室の前に立つと、中から彼の声が聞こえた。いつも通りの明るい声。さっきの真剣な声なんて想像できない。

（帰ろう。）

そう思つて無理矢理の作り笑いでドアを開ける。

ガララ……

「姉御、七瀬君に『好きです。』って言われたんだって？」

まことがいの一番に口を開いた。

「うん。『焼肉！』って。まことと同じって、どういうことよ？」

「私も同じこと言われたんだよ。私は言われた後、『あれってレタスで巻いて、生姜醤油で食べるとおいしいんだよね。』って言っただけだね。」

まことがそう言つと、生徒会室にいた全員（響君、楠原君、林原先輩、まこと、涼呼）は大爆笑。私は苦笑。……笑いながらも何だかいたたまれなくなつて、私は教科書をブックバンドでまとめた束と、かばんを持つと、

「今日は帰るね。」

とだけ言つて生徒会室を出て、逃げるようにして螺旋階段を下りた。後ろでだれかが何か言っていたような気がするけど、今日は無視した。

バスに乗ると1番後ろの席に座って、溜め息をついた。安心したら、鼻の奥がフーンと痛くなって、目頭が熱くなって涙が出てきた。（明日から、どんな顔して会えばいいのさ？）

その時、ベストのポケットの中のポケベルがふるえた。

「シゴトオツカレ。アイシテル！」

海だった。胸が痛んだ。だけど言わなきゃ。海にも、自分にも嘘はつきたくないし、つけないから。

R R R …… R R R ……

その夜、海に電話した。自分の気持ちを伝えるために。

「はい？ 奈緒？」

「うん。」

「どうした？」

「ん……、あの……あのね……。」

「どうした？ どもるなんて、奈緒らしくないけど。」

言いくい。遠距離恋愛だろうと、4ヶ月半も付き合っていると。

「あのね、私、海のが好き。だけど、一緒に生徒会やってる人のこと、自分でも気付かないうちに好きになってた。……だから、自分の気持ちに嘘はつきたくないの。隠しても顔に出る性格だから、いつかわかっちゃう。」

私はそこまで一息で言って、言葉を切った。のどの奥で、こくりと音がする。溜め息をつくと言った。

「私と別れて。」

そう言つと、海は電話の向こうで深い溜め息をついた。

「文化祭で会ってから、だいたい予想はついてたんだ。聞いても、『やっぱりな。』という感じだよ。」

ああ、経験豊富な海にはやっぱりかなわない。全部わかってた。「しばらくテストとかで予定空かないから、嫌だろうけど、夏休みにでも会ってくれないかな？ ポケベル返すから。」

「わかった。」

それだけ言つと、海は電話を切った。自分も電話を切ると、渡さ

れて以来、電源を切ったことのなかったポケベルの電源を初めて切った。何だか安心して、肩の荷が一気に下りた気がした。

その夜は、久しぶりに布団の中で泣いた。こんなに泣いたのは、中学１年生の時に付き合っていた人に、クリスマスにふられて以来だった。

海と別れてから、もう２週間近くたつ。いまだに響君には告白できないでいる。

告白を急ぐには理由がある。小学校のころ、気持ちを伝えられなまま初恋の人が転校してしまい、何も言えなかったことをすごく後悔したから。今は別に、響君が転校するとかというわけじゃないけど、何となく不安。だけど、彼が私の事を友達としか思っていない事と、もし、ふられた時に生徒会の中でギクシャクして、仕事をしにくくなるかもしれないことを考えると、なかなか告白にまで踏み切れない。彼も後期の役員をやるつもりでいるし、更に私には来期会長・副会長の話が出てくる。会長、副会長や副会長同士の関係がぎこちないと、他の役員の仕事にも影響を与えかねない。そう思うと、さらに二の足を踏む。

その日の放課後、いつもの様に職員室で会計の仕事を終え、生徒会室に戻る時、楠原君に

「話がある。」

と言われ、殆ど人が通らない北校舎を回る事にした。第二共通履修室の前で楠原君が

「ずっと言いたかったんだけど、僕、多分、菅井さんの事が好きだよ。」

と言った。

「はい？」

何じゃ、そりゃ？ 頭の中が”？”でいっぱいになる。

「だから、菅井さんの事が好きなんだってば。まだ、多分としか言えないけど、そのうちに本当に惚れそうなんだよ。」

この時点で私の思考回路は殆ど停止状態。今、私にできる事はただ1つ！

「ご、ごめん！好きな人がいるの！」

それだけ言つて、私は生徒会室の隣の物置と化していて、役員同士が個人的な話・相談なんかをする時に使う資料室に駆け込んだ（私も1人になりたい時に使うけど、鍵が掛かっていないなんて、何て無用心な生徒会なんだか）。

（告白された……。それも、よりによって、響君でなくて、楠原君に……。）

もう、頭の中が大混乱。ただでさえ、響君に告白するかどうかでいっぱいいっぱい、生徒会新聞の推敲で大忙しな時に（本当は資料室でこんな風に赤面している場合でもない）。「災いは忘れた頃にやってくる。」と言っけれど、それに「且つ、まとめてやってくる。」と是非とも付け加えたいものだわ。

（どうしよう……。響君の気持ちかわからない時に……。かと言って、楠原君の気持ちに応えるわけにもいかないし……。）

その時、資料室のドアを誰かがノックした。振り向くと、ドアの小窓から響君の前髪と、眼鏡が見えた。

「入ってもいい？」

その声に頷くと、響君がドアを開けて入ってきて、私の後ろに頭をかきながらしゃがみ込んで、

「どうしたの？ さっきからここにこもって、かなり経つけど。悩みとかがあるなら、聞くからさ。」

と言つてくれた（悩んでいる原因の一端は彼なんだけど）。

私はうつむいて、しばらく何も言えないでいた。

「話したくなったらでもいいから、俺にできる事があつたら言つてよ。何だか、最近の姉御、元氣ないから心配になるよ。」

そう言つて立とうとした彼のカッターシャツの裾を掴んで、やつと言えた。

「もう少し、ここにいられる？」

「？　いいよ？」

今の私のどこに、こんな勇気があったんだろうと思うくらい、思い切った行動だった。

心臓の音が、響君にも聞こえるんじゃないかと思うくらいに脈打っているのがわかる。

耳元で心臓が鳴っているような気がする。

「ごめんね、ちょっと気持ち落ち着かせるから。」

そう言って深呼吸をして頷く。

「この前、駐輪場の前で言われた時に気付いたの。……私、響君の事が好き。」

そう言って、彼の目を真っ直ぐに見つめた。彼は眼鏡の奥で瞬きを繰り返している。

そんな風にして、どれ程時間がたったんだろう。多分、それ程長い時間でもないんだろうけど、1時間くらいそうしていた様に感じた。

沈黙を破ったのは彼の方だった。

「俺、まだ菅井さんの事を友達としか思っていないんだ。この前でそう気付いたのなら、本当に悪かったよ。ごめん。」

そう言われて、私、それまで張り詰めていた糸が急に、呆気なくぷつりと切れた様に、緊張していた気持ちと、体中の力が体中から抜けていくのを感じた。同時に、海と別れた時と同じ様に、肩の荷が下りた気がした。

「そう……。ごめんね、忙しい時に時間取らせちゃって。」

響君が出て行くと、また溜息と後悔の嵐。

（言わなければ良かった……。これできつと、関係がギクシャクしてくるし、どんな顔して会ったらいいのかわからない……。）

そんな気持ちの頭の中でグルグル回って、マール模様の様にグチャグチャになって、何が何だかわからなくなる。更に、今、自分が座り込んでいるこの床がなくなつて、足元から暗闇の中に吸い込まれていきそうな気さえしてくる。

（言わなければ良かった……。）

そう思うと、鼻の奥が痛くなって、自頭が熱くなる。それを何とか堪えて生徒会室に戻ると、いつも最後まで残っているらしい七瀬君が、今日に限って、もう帰ったと真穂が言う。

「私も、今日帰る。」

それだけ言っただけで、鞆と教科書を抱えると、あの日と同じ様に、生徒会室から逃げる様に出た。

第6話（前書き）

響と一緒にゴミ箱を処分しに行った帰り、響から「好きです。」と言われた奈緒。しかしそれは彼のギャグで、「焼肉。」と言われてしまった。しかしその一言で、奈緒は自分の気持ちに気付いてしまう。思い切って告白はしたものの、「友達以上には見られない。」と言われてしまい・・・。

第6話

次の日から私は、響君と距離を置く様になった。用事のない時は生徒会室には行かずに、休み時間は友達と教室や廊下で話す。放課後はその日の仕事の確認と、会計の仕事だけして、終わればすぐに帰る。そんな事を繰り返して10日間、1学期の期末テストも終わった。

テスト最終日、いつもの様に仕事の確認を終えて帰ろうとすると、
「菅井さん、ちょっといいかな？」

響君に呼び止められた。うなずいた私を、響君は資料室に呼び出すと、

「この前は本当にごめん。」

と言った。

「しかたないよ。あれが響君の本当に気持ちなら。嘘つかれる方がずつと辛い。」

「あれからずつと避けられているから、なかなか言えなかったんだけど、考えたんだ。俺が菅井さんの事をどう思っているかって。」

彼はそこまで言うのと、1回息をついて言った。

「菅井さんの事が好きだと気付いた。もし、気持ち変わっていなかったら、付き合ってもらえないかな？」

そう言われても、私はしばらく何を言われたのか、さっぱりわからなかった。ただ首を傾げて立っているだけ。何か言わなきゃならない事はわかっているのに、どうしたらいいのかわからない。

「だめかな？ もし、だめなら諦めるよ。」

そう言われて、やっと、告白されたんだという事に気付いた。わかった途端に顔が熱くなって、その場に座り込んでしまった。その勢いで、髪をポニーテールに結んでいたゴムの結び目が解けて、ウエストまである長い髪が背中に、肩に広がる。

「もし、10日で吹っ切れる様な気持ちだったら、自分で自分の気持ちが信じられないじゃない。」

そう言って、苦笑しながら響君の顔を見上げた。彼もしゃがんで、できるだけ目の高さを合わせようとしてくれるけど、25cmの差は伊達じゃない。私の目の高さが彼の肩の下辺りだから、私が見上げなきゃ視線が合わない。

「え？……じゃ、今のは俺と付き合ってくれと解釈してもいいの……かな？」

恐る恐る（？）聞く彼に、私はやっと普通に笑って、

「そうでなければ、他にどんな解釈があると言っの？」
と言えた。久しぶりに、本当に笑えた。

その後の話を、後日談的に、ほんの少しだけ。

響（もう彼氏だから、”響君”は卒業）に告白の返事をした後、すぐに楠原君に告白を正式に断った（あの時はそれどころじゃなかったからね）。後期、楠原君は生徒会を引退して（たまに生徒会室に遊びに来るけど）、大学受験の勉強を本格的に始めた。

学校を休んでいた葉桜先輩は、出席日数が足りなくて、先生が「休学して、来年春からまた学校に来ればいい。」

と言っのを断って、任期中の9月半ばに退学した。

その後、響や秋や涼呼、桜、るいや平岡君、先生たちと散々揉めて話し合った結果、私が会長職を継ぎ、響が副会長を務める事になった。この時、響の友達で同じクラスの山崎君、山崎君が1年生の時に知り合った加賀谷君などが参入して、後期生徒会が発足した。

3年生になったら、さすがに受験勉強の為、響も私も生徒会を引退して、隠居するつもりでいたのに、残る役員が少なすぎて（新しく役員になる新2年生を含めても7人）、先生から

「残ってくれ。今辞められちゃ困る。」

と半分泣きつかれて、響が会長、私が会計などという担当で残り、

結局、私は一年半の3期、響は丸2年の4期、役員を努めた。

引退した後、私は公募制推薦で京都の私立大学に合格、響も地元の公立大学に合格し、それぞれ進学した。

卒業した後も、私（地元を出た役員）が実家に帰るたびに、元役員同士で会って、昼間からお酒飲みながらカラオケしたりしている。持っている通信手段も、響と付き合い始めた頃はポケベルやPHSという子が殆どだったのに、卒業する頃には皆携帯電話。時代の流れを感じる今日この頃。

それでは、また会える日を楽しみにして。

T H E E N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1345a/>

焼肉発言

2010年10月8日15時30分発行